

臨床實驗

「サルバルサン」注射の奏效せるウエルホッフ氏

紫斑病の一例

東京女子醫學專門學校病院小兒科教室(磯田教授)

川野邊 靜子

ウエルホッフ氏型紫斑病は原因不明なる特發性のものと、原因的疾患の明かなる所謂症候性のものとの二種に區別し得ることは成書にも記載せらるゝ所なり。私は最近ウエルホッフ氏病の一例に遭遇したるところ患兒はワ氏反應強陽性を呈したるを以て「サルバルサン」注射を施行したるに血液に顯著の影響を現はしたるを以てその一例を報告せんとするものなり。

患兒。三〇妻〇 十二年一ヶ月、女兒。

主訴。皮膚の斑點、顔色蒼白。

初診。昭和六年六月十日。

家族歴。母は病名不明にて八年前に死亡せり。父は健康にして父方の祖母が時々關節痛を憐む。姉妹二人で八歳の妹あるも健在なり。血族に遺傳的疾患並に同類の疾患を認められず。

既往症。實母死別の爲め詳細なる既往症を探知し得ざるも麻疹を經過せる外特別の病氣に罹りし事なきが如し。

一年前全身皮膚に點狀の發疹様のもの現はれ約十日間にして消失し、當時鼻出血を伴ひ其後も時々鼻出血を起したと言ふ。

現症。六月一日頃何等原因なく皮膚に大小種々の斑點現はれ始めは下腿、上肢、腋窩次で全身に擴れり。其頃より顔色幾分蒼白になりしと云ふ。腹痛、關節痛なく氣分も平常にして發熱等認められず食欲尋常にして便通は一日一回なりと言ふ。

現症所見。榮養状態は多少不良にして顔色軽度に蒼白なり。皮膚には點狀及粟粒大乃至麻實大の出血點全身に見られ、殊に胸部、腹部、肩胛部に多數認めらる。其外右上肢、腹壁、右下肢にそれぞれ三―四ヶ宛、腋窩に一ヶの大なる赤紫色の斑狀出血を認む。其の形は圓形若くは不正橢圓形にして大きさは小なるは拇指頭大、大なるは鶏卵大に及ぶ。

口腔粘膜には硬口蓋に、三―四箇、右頬粘膜に一箇の點狀出血あり。結膜に變りなく鼻出血を認めず。

胸部、腹部の内臓、淋巴腺、骨系統に異常なく肝臓、脾臓をふれず四肢骨は臨牀上のみならず、X線寫眞によるも病的變化を見ず、尿は「インデカン」、「ウロビリノーゲン」弱陽性の外、蛋白、糖、「アセトン」、「デアツオ」、「グメリン」、「ウロビリ」凡て陰性、沈渣に赤血球なし。便に少數の鞭蟲卵を證明した外、他の寄生蟲を見ず、潛血試験陰性。

ワッセルマン氏反應は強陽性なるも他に何等の黴毒症候を認めず。

マントウ氏反應陽性にして縦四十糎、横三十五糎、對象は縦横共に五糎。

血液所見は表一の如し。

血小板數(フオニオ氏法)二萬四千六百五十即ち健康兒(十二萬—十五萬)に比し著しく減少。凝固時間(佐藤氏法)三分にして殆んど正常。

出血時間はフランケ氏針を用ひて二十三分即ち著しき延引を示す。(正常一—三分)

月日	赤血球	白血球	血小板	白血球(サウラー)	中性嗜好	分葉核	桿狀核	エオゾフ嗜好	嗜基嗜好	淋巴球	小淋巴	大淋巴	單核球	移行型	大單核	内被細胞	凝固時間(28°)	出血時間
10/V	493萬	5440	24650	63	51.2	48.0	3.2	4.0	0.8	34.8	34.8	0	7.6	7.6	0	1.6	3分	23分

以上の所見殊に血液所見により血小板減少症即ちウルホーン氏病型紫斑病なる事明かなり。

経過 六月十一日入院し入院後は安静と「トロンボゲン」注射とを行ひ、経過を観察することゝせり、「トロンボゲン」は六月十一日より十六日まで毎日三瓦皮下に注射せり。治療経過中症候は次第に輕快し六月十九日口腔内に二三箇の點狀出血を生じた外、新しき皮下出血は一ヶ所も現はれざりき。而して血液は表二に示す如き變化をとれり。

月日	赤血球	白血球	血小板	白血球(サウラー)	中性嗜好	分葉核	桿狀核	エオゾフ嗜好	嗜基嗜好	淋巴球	小淋巴	大淋巴	單核球	移行型	大單核	内被細胞	凝固時間(28°)	出血時間
10/V	493萬	5440	24650	63	51.2	48.0	3.2	4.0	0.8	34.7	34.8	0	7.6	7.6	0	1.6	3分	23分
18 V	486萬	9000	13980	65	54.8	48.0	6.8	13.0	0.8	24.4	24.0	0.4	6.4	5.6	0.8	1.6	3分	10分
16/V	545萬	8400	81750	67	53.3	52.0	1.2	13.2	0.4	34.4	24.0	0	2.8	2.8	0	0	3分	6分
19/V	519萬	6320	2595	76	33.6	32.4	1.2	15.2	0	43.2	43.2	0	7.6	7.2	0.4	0	4分	5分
22/V	475萬	9400	99750	64	44.4	39.6	4.8	11.2	0	40.0	39.6	0.4	0	2.0	0	2.4	3分	5分

即ち出血時間は六月十日に二十三分のものが漸時短くなり、六月十九日には五分となりしも尙正常値より多少延引す。血小板は動搖を示し或時は幾分増加し、又或時は著しく減少して血小板数は依然として正常に復する事を得ず。

「サルバルサン」治療。こゝに於て患兒はワ氏反應強陽性なるを以て「サルバルサン」療法を試みたらんには或は血小板數に影響せざるやを思ひ、「サルバルサン」注射を施行する事とせり。即六月二十七日より八月十五日まで體重一疇に對し、「サルバルサン」〇・〇一の割にて前後八回の注射を行へり。而るに血液の變化は表三の如く血小板の増加顯著にして平常位に接近し、出血時間も漸時短縮して健康兒に等しくなりたるを見たり。

月	日	血小板數	出血時間	血色素量 (「サークラー」)
10/VI	初	24,650	23分	63
13/VI	「トロンボゲン」2回注射後	13,980	10	56
16/VI	「トロンボゲン」5回注射後	81,750	6	67
19/VI	注 射 中	2,595	5	76
22/VI	注 射 止	99,750	5	64
18/VII	「サルバルサン」2回注射後	267,550	3	78
25/VII	「サルバルサン」4回注射後	212,800	2	66
8/VIII	「サルバルサン」6回注射後	254,930	2	71
15/VIII	「サルバルサン」7回注射後	144,650	2	72

斯くの如くにして血液の血小板數及び出血時間の變化容易に恢復せざりしものが「サルバルサン」注射によりて著明の效果を見たるは興味あるものなりと思考す。(本患兒は日本小兒科學會東京地方會にて供覽せしものなり)

終に御指導仰ぎし磯田教授、病理學教室に深謝す。